

カントに於ける必然的存在者の概念の研究（五）

草 野 章

四

先ず汎通的規定の原則に基づく最實在的存在者の現存の証明の批判の要点を確認して置こう。前稿で見たようにカントにとつての「實在性」とは感覚に対応する概念であつた。感覚は経験の「質料」であり、これなくしては抑も経験が成立しない。勿論経験の「形式」がなくても経験は構成されないが、質料なくしては形式が適用されてその「客観的妥当性」が証示される領域が失われてしまう。理性はこの質料の制約を忘却して、感覚に由来する「客観的實在性」から離れているにも拘わらず、「あらゆる存在者の可能性の最高且つ完全な質料的制約を構成する超越論的理想」⁽¹⁾を——それは経験と不可分に結び付いている「客観的實在性」と殆ど何の關係も持たないものと見做されているのであるが——物一般の可能性の質料と経験の可能性の質料というふたつの質料概念の「超越論的窃取」⁽²⁾によって実体化してしまう傾向を有するのである。在来の神の

現存の証明を批判する際にカントが根本的論点としてゐるのはこの点であることを見落としてはならない。簡単に言えば質料概念の混同が誤つた神の現存の証明を招来するのである。無制約者という概念自体の、経験に基づく「客観的實在性」を証明することはできない。何故ならそれは我々人間の経験を超越しているからである。しかしそれにも拘わらず、「あらゆる實在するものは汎通的に規定されている」という汎通的規定の原則が真なるものである限り、換言すれば被制約的な何ものかが存在し、それに述定される述語の肯定—否定という弁証法的操作の根底に要請される無制約者の存在を少なくとも否定することができない限り、理性は絶対必然的存在者という理念を無下に斥けられないどころか必然的に想定せざるを得ないのである。ある何ものかが「實在」する。然るにそのものは汎通的に規定されているから、その「實在性」は制限された「實在性」であり、従つてその根底には無制約的な「實在性」即ち「全實在性」(omnis realitatis, omnitudo realitatis)が必然的に想定されな

ければならない。これこそ「最實在的存在者 (ens realissimum)」の概念であり、あらゆる實在的なものの「共通の基体」なのである。

「もののすべての多様性は共通の基体であるところの最高實在性の概念を制限する様々な仕方過ぎない。それはすべての図形が、無限の空間を制限する異なった仕方としてのみ可能であるのと同様である。それ故専ら理性の内に存する、理性の理想の対象は根源的存在者 (ens originarium) と、それが自らより上の存在者を持たない限り最高存在者 (ens summum) と、制約されたものがすべてその下にある限りは、存在者のなかの存在者 (ens entium) と名付けられる。」³ 勿論これは様々な存在者をすべて寄せ集めた結果として構成されるものではない。制約されたものを幾ら寄せ集めても無制約者を構成することができないのは明らかである。斯くして根源的存在者は多なる存在者の一なる根源という性格を持つから、「単純 (einfach)」であり、「最高實在性」という概念からのこれ以外の直接的帰結として、「唯一」、「充足」、「永遠」等の述語を持つのである。⁴ これが超越論的意味での（同時に伝統的形而上学の神概念をも覆う）「神」の概念であり、「超越論的神学の対象」であった。

カントが伝統的形而上学者としても発言しているのは明白であるが、斯かる発言のすぐ後に、「これほど格別な優れた点を有する存在者の實在に関して我々は完全に無知なのである」とか「単なる虚構である」とかと言われるのである。⁵ 「全實在性」と言っても、物一般の汎通的規定の根底に置かれるそれは感覚に由来する「客觀的實在性」ではなく、物の可能的述語一般の基体になると想定され

るひとつの「理念」若しくは「實在性の概念」なのである。我々人間にとつての「實在性」は感覚に由来するのだから、現象を離れては、或いは経験を離れてはありえない。とすれば「全實在性」は「経験的實在性の総括」⁶ として把握され直さなければならぬのである。「ある自然な錯覚によつて我々は本来感官の対象として与えられる物にのみ妥当する原則をあらゆる物一般に妥当しなければならぬ原則と見做すのである。従つて、この制限を除去することによつて、物を現象として可能となるものとして把握するという経験的原理を我々は物一般の可能性の超越論的原理と見做すことになる。」⁷ 斯くして汎通的規定の原則に基づいて最實在的存在者の現存を証明することはできない。何となれば汎通的規定の原則に基づいてこれを証明しようとするならば、物一般の可能性の総括である「全實在性」が我々にとつての實在性の根拠でなければならぬが、それは我々の経験を懸け離れたひとつの「超越論的理想」なのであつて、我々の感覚に由来する、現象を構成する「實在性」の根拠たりえないからである。汎通的規定の原則に基づいて最實在的存在者の現存を証明しようとした在来の神の存在証明は、超越論的哲学の観点からすれば、「實在性」概念の洞察の不足と誤りに、或いは先の表現を使えば、ふたつの質料概念の混同に由来することになる。

「純粹理性の理想」第二節に於いては以上のように、汎通的規定の原則に基づく最實在的存在者の現存の証明がカントの超越論的哲学の観点から批判されるのだが、これはアンセルムス、デカルト、

ライブニッツ等が依拠していた「最完全存在者 (*ens perfectissimum*)」としての神の存在証明の核心を批判するものともなっているであろう。これだけでも既にその意義は極めて重大なのであるが、伝統的形而上学に由来する神の存在証明に対するカントの批判はこれだけに留まらないのであって、彼の批判は次に最實在的存在者の概念と「必然的存在者 (*ens necessarium*)」の概念の結合の妥当性の問題に向けられるのである。

五

それでは次に「思弁的理性が最高存在者の現存在を推論する諸々の証明根拠について」という表題を持つ「純粹理性の理想」第三節の考察に移ろう。第三節は以下の如く開始される。

「悟性の概念の根底に完全に存在して悟性の概念を汎通的に規定する何ものかを前提するという、理性のこの切実な欲求にも拘わらず、理性は斯かる前提が観念的であり且つ専ら虚構されたものだということに余りにも容易く気が付くので、このことのみによって理性が説得されて、自分の思惟が専ら自分で創つたものを直ちに現実の存在者と想定するようなことはまずあるまい、これによって所与の被制約者から無制約者に至る遡行の何処かで休止点を探すよう別様に促されるのでなければだが。この無制約者は確かにそれ自体として且つその概念からして現実存在しているものではないが、それのみがその諸根拠へと導かれる諸制約の系列を完成することができるのである。さてこれがあらゆる人間の理性が、最も普通の理性

ですらも取る自然な進行である、尤もどの理性もこの進行に於いて挫けないという訳ではないが。理性は概念からではなく、普通の経験から出発するのであり、しかも何か實在するものをその根底に置く。しかしこの地盤は絶対必然的存在者という不動の岩盤の上に憩っているのだから沈下するのである。しかしこの岩盤そのものは、その外と下に空虚な空間があるならば、また自らがすべてを満たして、何故にという問に対して何らの余地も残さない、つまり實在性の面から無限でなければ、支えなく浮游するのである。⁸⁾」

注目すべきは、理性の出発点が「概念」ではなく、「経験」とされていることである。如何に思弁に関わろうとも、理性は感覚に由来する「實在性」をひとつの契機とする「経験」を全く離れて超越の対象を我物とする権能を付与されている訳ではない。我々人間にとつての「真理の国」は空間・時間による直観の形式とカテゴリーによる思惟形式によつて画定されているのであって、これを踏み越えるならば直ちに「仮象の住処」へと彷徨うことになる、というのが『純粹理性批判』の基本的見解であつた。⁹⁾ 個物の汎通的規定の根底に想定される *omnino realitatis* を、理性は個物の現存理由の説明のために必然的に前提せざるを得ないが、それは感覚に由来する實在性を有するものではないので、畢竟「観念的」なものとしかならず、従つて理性がこれを現存するものとして認定することは本来その能力を越えた事柄なのである。「経験」の地盤を離れては真理はありえない。理性が真理に関わるべきものであるならば、経験を超越した領域に飛翔してはならないのである。「何であろうとも、

何かが実在するならば、何らかのものが必然的に実在するということが容認されなければならない⁽¹⁰⁾し、また「(現象に於ける)物そのものを構成するもの、即ちそれ無くしては物が思惟せられ得ないであろう実在的なもの (das Reale) は存在しなければならぬ、しかしその内に於いてあらゆる現象の実在的なものが存在するところのものは全てを包括する唯一の経験である⁽¹¹⁾」とカントは言う。現象に於ける実在性は経験を基盤にしており、「真理の国」に留まろうとする限り理性もここから出発する以外にないのだが、「理性本来の究極的目的は無制約者⁽¹²⁾」であり、これを求める理性は自ずと、他のあらゆる物を制約するがそれ自体は何ものにも制約されない「必然的存在者」に現象に於けるあらゆる実在的なものの究極的な支えを見出さんとするのである。「総じて現存の状態にある被制約者は偶然的であり、無制約者は必然的である⁽¹³⁾」という表現からも解るように、被制約者＝偶然的存在者の総体である世界と、世界の基盤であるが故に世界の中に現れず、従って世界を超越した無制約者＝必然的存在者との対置という伝統的形而上学の基本図式にカントも乗っている。「偶然的なものはその原因として他の偶然的なものの制約の下に存在し、しかもこの推論はこの原因に関して当嵌り、遂には偶然的ならざる、まさにそれ故に制約無しに必然的に存する原因にまで至るのである。これこそ理性が根源的存在者に至るその歩みをその上に基づける論証なのである⁽¹⁴⁾」超越論的哲学の視点に立つとき、これは如何に批判されるのであろうか。

偶然的存在者からその根拠となる必然的存在者へと至る推論をカ

ントは「不可避」で、「極めて注目値する」と形容している⁽¹⁵⁾。この推論は宇宙論的証明の根拠となるものであるのだが、宇宙論的証明は「専ら無規定的経験、即ち何らかの現存在を経験的にその基礎に置く⁽¹⁶⁾」ものであった(カントはこれをライブニッツが「世界の偶然性からの証明(a contingencia mundi)」と呼んだものだと言う)。しかしカントによれば宇宙論的証明(また自然神学的証明も)の根底には存在論的証明が存しており、前者の証明力は後者がすべて含むのであって、前者は斯くして「隠された存在論的証明」に他ならなかったのである。存在論的証明こそは「唯一可能な証明⁽¹⁷⁾」であった。「普通の経験」から出発して必然的存在者の現存を不可避的に想定せざるを得ない理性は果たして望むものを手に入れることができるのであろうか。勿論カントの答は「否」であるのだが、それは単に必然的存在者が経験を超越したものであるからという理由のみによるのではない。それは言うまでもなく超越論的哲学の観点からの大きな理由ではあるが、しかし一方では神の存在論的証明に対するカントの批判は伝統的形而上学の枠内での批判という側面も併せ持っているようである。

何らかの現存在を根底に置いて必然的存在者に至る方が正当なものならば、必然的存在者の概念から直接その現存在を導出する方は自ずから排除される。とすれば「絶対必然性」という特徴に適合し、且つ必然的存在者の概念にいわば現存在を保証してやれるような存在者を別に見出す必要が生ずるのである。カントはいわば消去法を用いてこの作業を行おうとする。理性は絶対必然性に適合し

た存在者の概念を探すが、それは「可能的なもの」のあらゆる概念の下に、絶対必然性に矛盾するものを自らの内に含まない概念を見出すため⁽¹⁸⁾である。ライプニッツに於けるのと同様カントに於いても、一般に可能性の概念は実在性若しくは現実性の概念より広い⁽¹⁹⁾。感覚に由来する「実在性」との繋がりが無くとも、悟性や理性には可能的対象の広大な領域が開かれており（尤も真理認識の成立が拒まれている領域ではあるが）、先の如き存在者はこの領域中にしか見出され得ない筈なのである。斯くして「絶対必然性と折り合わないものを理性がすべて除去すれば、残るのは端的必然的存在者（das schlechthinnotwendige Wesen）であるが、それが必然的であることをその概念からのみ導出しうるか否かはどちらでもよいことである⁽²⁰⁾」ということになる。断るまでもなく、必然的存在者の概念に適合すると予想される概念は「純粹理性の理想」第二節で既に提示されていた、汎通的規定の根底に存すると想定される「最実在的存在者」のそれである。

「その概念がどんな問（Warum）に対しても答（Darum）を含み、如何なる部分に於いても如何なる観点に於いても欠陥がなく、何処でも制約として不足がないものは、まさしくその故に絶対必然性に適合した存在者であるように見える。何となればそれは如何なる可能なものに対しても制約を自ら所有しているため、自らは制約を要しない、いやそれどころか制約不能なものだからである。従ってそれは少なくとも一部分に於いては無制約的必然性の概念を満足せしめるものであるが、この点に於いて如何なる他の概念もこ

の概念に匹敵し得ないのである。そのような概念は足りないところがあつて補足を必要とするので、あらゆる一層の制約から独立しているというそうした特徴を自らに帯びていないからである……それ故最高の実在性を有する存在者の概念ならばあらゆる可能的なものの概念の内、無制約的必然的存在者の概念に最もよく適合するであろう。しかも前者が後者を完全に満足せしめなくとも、我々には選択の余地がなく、これに縋らざるを得ないのである。何となれば必然的存在者の実在を無視することは我々には許されないで、これを許容するのだが、可能性の全領域に於いて現存する斯かる優れた点に対してこれ以上根拠づけられた要求を為し得るものを我々は見出し得ないからである⁽²¹⁾。必然的存在者はいわば事物の最終根拠であるから、これ以外の一切の制約となるがそれ自体は何ものにも制約されない無制約者である。それは先に見た如く「実在性の面からは無限」であるから、実在する事物の根拠への問はこれの所で終結し、如何なる制約された事物もこれを起点とした系列の中に位置付けられる。斯くして如何なる事物もそれが実在している限りその最終根拠は最早何らかの制約を有する偶然的存在者ではないところのもの、即ち必然的存在者に遡源すると想定されるのである。カントは「実在性の面からは無限」である最実在的存在者が必然的存在者でもあるとの推理を「人間理性の自然な歩み」と形容している⁽²²⁾。

「理性は先ず何らかの必然的存在者の現存在を確信する。これの中に理性は無制約的実在を認識する。そこで理性はどんな制約にも

依存していないものの概念を探して、それを他のどんなものに対しても自ら充分な制約であるものの中に、つまり一切の實在性を含むものの中に見出すのである。制限のない一切者 (Das All) とは絶対的統一であつて、唯一者という、即ち最高存在者という概念を伴つており、それで理性は一切の物の原根拠として最高存在者が端的必然的に現存すると推論するのである。⁽²³⁾

必然的存在者の現存に至る推理と最實在的存在者の現存に至る推理は異なる経路を取っている。前者は何らかの事物の現存在 (「私」自身の現存在でも構わない)⁽²⁴⁾ に関する「経験」から出発するのに対して、後者は「汎通的規定の原則」に基づいている。我々の経験の対象の総体である世界に於いては被制約者Ⅱ偶然的存在者しか見出されないから、必然的存在者は世界の内なる存在者ではなく (第四アンチノミーでは世界の内なる存在者として考察されたのだが)、従つて原理的に我々の経験の対象となりえないものであるが、しかし何らかの事物の現存在の根拠として理性がこれを想定せざるを得ないものである。被制約者の最終根拠を再び被制約者に求める訳にはいかない。更なる制約の根拠への問を解消しえないからである。だが「實在性」が「感覚」に、従つて「経験」に由来する以上、世界の内なる存在者でない必然的存在者は経験の対象でないから、如何なる「實在性」も有し得ない。とすれば必然的存在者の現存在の証明は、経験に由来しない「實在性」を別の所から導出してこれに付与しなければ果たされ得ないのである。また「その非存在が不可能な物」という「(絶対) 必然的存在者」の名目的定

⁽²⁵⁾ 義を持ち出しても、経験に由来する實在性の概念を堅持する限り、その現存に関して何も語つたことにならないであらう、とカントは考えているようである。それにも拘わらず我々の経験の対象たる偶然的存在者の系列の統一を理性が超越論的理念として追究する限り、必然的存在者の現存は不可避免的想定として理性に立ち現れて来るのである。経験不可能な対象の現存の想定不可避性——カントの必然的存在者の概念に常にとわりついているのはこの問題である。「……私は實在するもの一般に対して何か必然的なものを想定せざるを得ないけれども、如何なる物もそれ自体として必然的であると思惟することはできない。つまり必然的存在者を想定しないことには實在するものの諸制約への遡源を完成することは決してできないが、必然的存在者からは決して始められないのである。」⁽²⁶⁾

六

「汎通的規定の原則」は「一切の實在するものは汎通的に規定されている」という命題であるが、これは勿論我々の経験の対象である事物にも適用される。あらゆる物が汎通的に規定されている限り、それはその「實在性」に関して制約を受けていることを意味する。物の「實在性」を表現する「超越論的肯定」とその否定を表現する「超越論的否定」が相俟つて具体的な事物を構成するのである。そして物の實在の最終根拠は超越論的肯定がすべてそこから由来する「可能的述語の総括」たる *omnium realitatis* に求められるのであり、超越論的否定も「實在性」の「制限」に他ならないから、

畢竟それは「実在性」を、究極的には *omnitude realitatis* を前提していることになる。⁽²⁷⁾そして *omnitude realitatis* は「一切の実在性を、従つてまた一切の制約を含む」⁽²⁸⁾から、それ自体は「無制約者」と考へられるのである。それ故 *omnitude realitatis* たる「最實在的存在者」はそのまま「無制約者」であり、従つて「必然的存在者」である、という推論が為されることになる。しかし「無制約者」であるが故に「実在性の面からは無限」⁽²⁹⁾であると想定される必然的存在者の現存は経験に基づく「実在性」を有しないから、もしこれの現存を証明しようとするならば経験に基づかない「実在性」の由来を示さねばならない。斯かる「実在性」が感覚若しくは経験に由来する「実在性」に取つて代わることができるならば、必然的存在者の現存の証明は可能となるであろう。そして伝統的形而上学に於いて前者の実在性を有すると考へられてきたものが、「最實在的存在者」に他ならないのである。「最實在的存在者」の概念こそは必然的存在者の現存が想定される限り、「可能性の全領域に於いて」⁽³⁰⁾これを充足せしめ得る唯一の概念なのである。

しかしこれらふたつの概念の結合の事情は決して単純なものではない。必然的存在者の概念を充足せしめ得る唯一の概念が最實在的存在者の概念であろうことに「選択の余地はない」のかも知れぬが、事情は少なからず複雑である。何となればカントは以下の如く言うからである、「このことから最高の、またあらゆる点に於いて完全な制約を自らの内に含まないものは、その故に自らその実在に關して制約されていなければならない、とは未だなお確實に推論さ

れ得ない、というのは真である。しかしそれはやはり無制約的現存という唯一の徴表を自らに有していないが、これこそ或るア・プリアリな概念を通じて何らかの存在者を無制約的なものとして認識するために理性が自在に用いるところのものなのである」⁽³¹⁾と。カントが言わんとするところはあまり明確でないが、最實在的存在者でないものがそのまま被制約者＝偶然的存在者であるとは必ずしも言えない、即ち必然的存在者である可能性もあるが、最實在的存在者でないものが無制約的現存を有することはないのである、ということであろう。「或るア・プリアリな概念」とは絶対必然性の概念だと思われるが、そうだとすれば理性はこれによつて何らかの存在者の無制約的現存に至らんとするのである。最實在的存在者の概念と必然的存在者のそれとの結合はそれ自体必然的ではないが、必然的存在者の概念を充足せしめる概念としては最實在的存在者のそれ以外には「選択の余地がなく」、「決断」(*Entschließen*) が問題となる場合には、即ち何らかの必然的存在者の現存が一度許容される場合には、この概念(最實在存在者の概念)に対してある程度の徹底性を認めない訳にはいかなないのであり、……可能性の源泉としての完全な実在性の絶対的統一に対して同意の一票を与えるよう強いられるのである(括弧内筆者補足)。⁽³²⁾しかし「決断」ではなく、「判定」(*Beurteilung*)」が問題となる場合には、「その権利要求の欠点を埋め合わせるために好意」(*Günst*) を要求するのである。⁽³³⁾

ふたつの点は確認されている。即ち或る事物の現存から絶対必然的存在者の現存へと推論されること、そして「あらゆる実在性を、

従つてあらゆる制約を含む存在者を端的に無制約的なものとして見做さねばならぬ」ことである。⁽³⁴⁾しかしながらこれによつて「絶対必然性に適合した物の概念が見出されるとしても……最高の實在性を有しない制限された存在者の概念は、その故に絶対的必然性に背反すると推論される訳にはいかないのである。」⁽³⁵⁾これは、上にも述べたことだが、實在性に関して制限された存在者が必然的存在者でありうるという可能性を排除できないということであろう。つまり最實在的存在者の概念と必然的存在者のそれとの結合の「ア・プリオリな可能性は洞察されないままなのである」。

斯くして被制約者の概念に関してその必然性を論証することはできないけれども、それが必然的存在者であることを積極的に否定する論拠もまた存在しないことになる。「しかし斯かる仕方ではこの論証は必然的存在者の諸性質を我々に少しも把握せしめず、全く何も成就することがないであろう。」⁽³⁶⁾カントはその他に実践的法則の存在根拠に訴えてもいるのだが、両概念の結合の論証は結局は「客観的に不十分」⁽³⁷⁾なのである。他方、我々は被制約者＝偶然的存在者の系列の起点を世界の外に求めざるを得ないにも拘わらず、我々の感覚に基づく「實在性」は世界の内に局限されるが故に、必然的存在者の現存を経験によつて証明することは不可能である。それ故これを証明するためには他に選択肢が存在しない以上「現存」がその概念に含まれると考えられる最實在的存在者の概念に依拠するしかないということになる。「絶対必然性とは専ら概念に基づく現存なのだ」⁽³⁸⁾からである。「宇宙論的証明」が論ぜられる第五節に於いても

経験的論拠が必然的存在者の性質や現存の解明に関して無力であることが繰り返して述べられている。宇宙論的証明はそれ自体としては成り立たないのであつて、その証明力を存在論的証明に求めなければならぬのである。とは言え、被制約者＝偶然的存在者の根拠の連鎖を辿るという推論は「大変單純で自然であるから、最も普通の人間の感性にも適合している」⁽³⁹⁾ものである。そしてそれは結局「最上位の原因性 (die obere Kausalität)」の探究を課題とすることになるのだが、この原因性が「最高の原因性 (die höchste Kausalität)」である最實在的存在者に置かれることになる。

「さて最高の原因性が在る所によりも正当に何処に最上位の原因性を置くべきであろうか。最高の原因性とは可能な結果に対する充足性を自らの内に根源的に含み、その概念は一切を包括する完全性という唯一の特徴によつて非常に容易く成立するのである。この最高の原因性を我々は端的に必然的と見なすが、それはこの原因にまで上昇することを我々は端的に必然的と考えるからであり、またそれを更に越えて行く理由を見出さないからである。」⁽⁴⁰⁾

必然的存在者の概念と最實在的存在者のそれとの結合には必然性が存しないにも拘わらず、實在性の究極的根拠への遡源は理性にとつての不可避の課題である。必然的存在者である「最上位の原因性」は経験の領域に現れないから、その存在を証明するには、伝統的形而上学に於いて「最高の原因性」と考えられてきた最實在的存在者の概念を根底に置き且つこれから出発するより他の選択肢がない。最實在的存在者が汎通的に規定された被制約者＝偶然的存在者

の實在の究極的根拠若しくは原因だと考えられるならば、原因の連鎖の果てに位置する必然的存在者の経験に拠らない存在証明は最實在的存在者の現存のA・プリアリな証明に他ならないであろう。

「最高の原因性」の現存の証明は「最上位の原因性」の現存を経験を俟たずに証明することになるとカントは考えている。「最上位の原因性」である必然的存在者の存在証明は「最高の原因性」である最實在的存在者の存在証明の成否にその可能性を全て委ねている。周知の如くカントの答は「否」であるが、「否」であるからこそ他のふたつの証明である宇宙論的証明と自然神学的証明の成否が別途検討されることにもなるのである。斯くして最實在的存在者の現存の証明を否定するカントの思索を考察することが次稿の課題となろう。

【註】

使用したテキスト及び引用の仕方は従来通りである。註の番号は前稿からの通し番号に示なかった。

- (1) A576/B604.
- (2) A583/B611.
- (3) A578-9/B606-7.
- (4) Vgl.A580/B608.
- (5) A579-580/B607-608.
- (6) A582/B610.
- (7) a.a.O.
- (8) A583-4/B611-2.
- (9) Vgl.A235/B294ff.
- (10) A584/B612.
- (11) A581-2/B609-610.
- (12) A417/B445.
- (13) A419/B447.

- (14) A584/B612.
- (15) A615/B643.
- (16) A591/B619.
- (17) A630/B658, A625/B653. これは勿論経験に拠らない証明が可能であるなら、¹⁷ という仮定に基づいて主張されることである。
- (18) A585/B613.
- (19) カントに於ける「可能性」の問題に関しては、黒田亘『経験と言語』(東京大学出版会、一九八三年) 第四章「経験の可能性」を参照されたい。
- (20) A585/B613.
- (21) A585-6/B613-4.
- (22) A586/B614.
- (23) A586-7/B614-5.
- (24) A588/B616, A604/B632.
- (25) A592/B620.
- (26) A615-6/B643-4.
- (27) Vgl.A574-6/B602-4.
- (28) A588/B616.
- (29) A584/B612.
- (30) A586/B614.
- (31) a.a.O.
- (32) A587/B615.
- (33) Vgl.a.a.O.
- (34) Vgl.A587-8/B615-6.
- (35) A588/B616.
- (36) a.a.O.
- (37) A588-9/B616-7.
- (38) A607/B635.
- (39) A589/B617.
- (40) A590/B618.

【付記】

本稿は平成十三年度工学院大学総合研究所一般研究費による研究成果の一部である。

(くさの あきら 本学共通課程助教授 哲学)